

兵器の様相から見た古代山城

小嶋 篤（九州国立博物館）

はじめに

日本列島で古代山城が相次いで築造された7世紀後半は、百済復興運動や壬申の乱をはじめとした軍事的衝突が頻発した律令国家形成期にあたる。古代山城の性格については、近年では地域支配の拠点機能も想定されるなど、研究の盛行に伴って多様な見解が提示されている。ただし、第一義の築造目的は交通の要衝に配された防衛施設という見解が主流であり、発表者も同じ立場をとる。

では、「日本列島に築かれた古代山城は、どのように兵器を貯え、どのような兵器を用い、どのような戦闘を想定していたのだろうか？」

この問い合わせを追及するために、本研究では二つのアプローチを試みる。まず、考古資料として現存する兵器の検討に基づいて、物質的側面から古代の戦闘に用いられた兵器を明らかにする。その後、文献史料の記述から古代山城を運用していた時代の戦闘の実像に迫りたい。戦闘の記録は幾人もの人物を介した主観的情報である。また、現代人の合理的思考と古代人の合理的思考は乖離する。これらの点を認識しつつ、『歴史学』の立場から「兵器」を基点に古代山城を検討する。

1. 古代山城で用いられた兵器

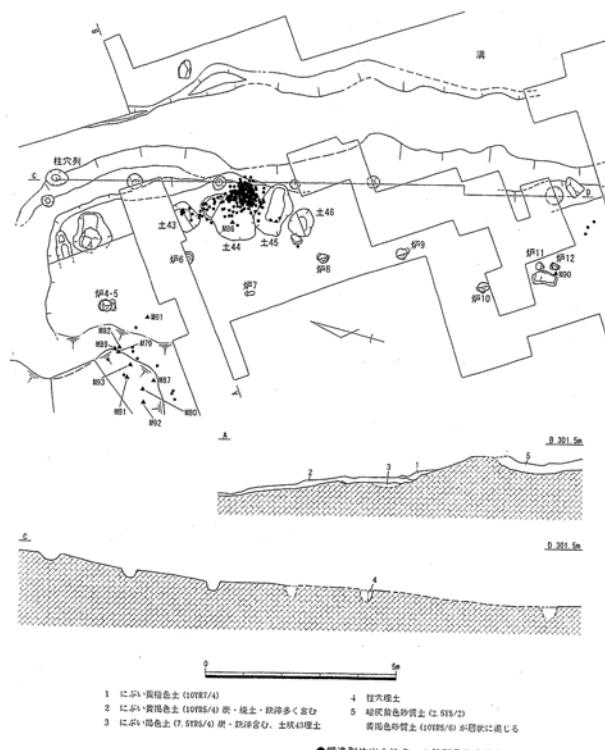
(1) 鬼ノ城跡の鉄器生産

古代山城では、どのように兵器を貯えていたのだろうか。まずは、城内での鉄器生産の様相が判明している鬼ノ城跡の発掘調査成果を検討する（図1）。

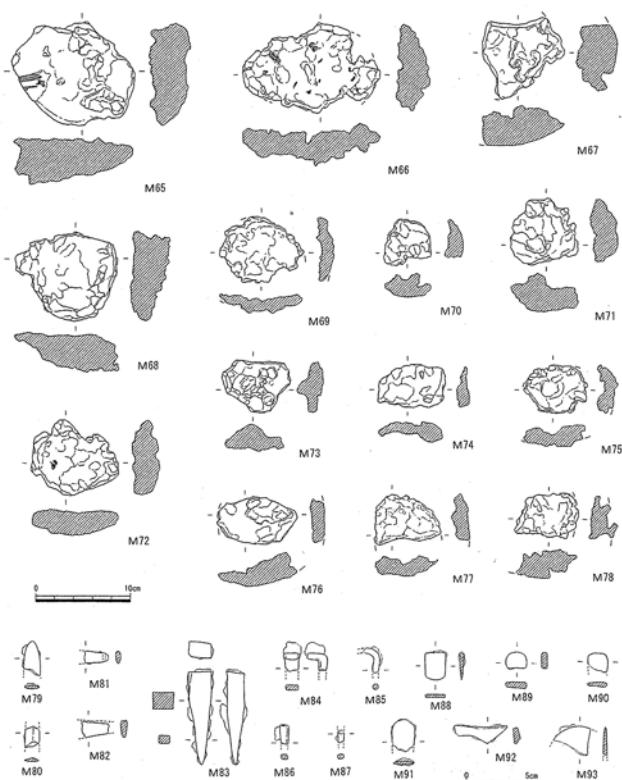
鬼ノ城跡は吉備高原の南端に位置する古代山城で、眼下には総社平野が広がる。城内確認調査に伴う発掘調査が計画的に実施され、城内の様相を具体的に把握できる。とくに、調査区Ⅲ区で発見された鍛冶工房は、古代山城城内で操業された工房の実態が分かる貴重な事例である。以下では、発掘調査報告書『史跡 鬼城山2』を基に鍛冶工房の概要を説明する（岡山県2013）。

鍛冶工房（調査区Ⅲ区）は鬼ノ城跡城内の東側で確認された。検出地点は3地点（Ⅲ-1・2・3区）に分かれ、いずれも東門に続く尾根線上に立地し、第4水門へとつながる谷筋に面している。3地点のうち、Ⅲ-3区の鍛冶工房では、桁行（南北）6間以上（13m以上）の長大な建物の屋内に、7ヶ所以上の鍛冶炉が列状に配された状況にある。列状配置の大型鍛冶工房は官衙や有力寺院に類例が求められ、「官営」の事業として操業されたと把握されている（岡山県2013）。また、鍛冶炉の一部（鍛冶炉4等）は、使用後に放置された状態で検出されており、操業時の様相を残す。

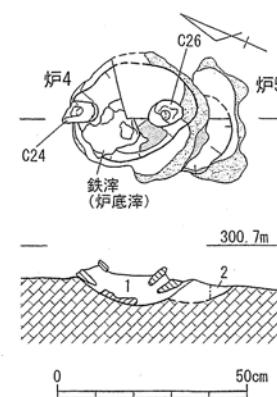
操業実態については、尾上元規氏・上梅武氏による考古学的検討、大澤正巳氏による金属学的検討から、鍛冶原料鉄として磁鐵鉱由来の半製品（棒・板状）が大量に用いられた可能性が高く、一部では精製鉄塊の搬入が想定されている（岡山県2013）。また、折り曲げられた鎌や刀子・鉄釘の残欠から、廃鉄器を素材として転用する状況も伺える。本工



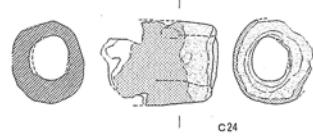
III-3区鍛冶工房



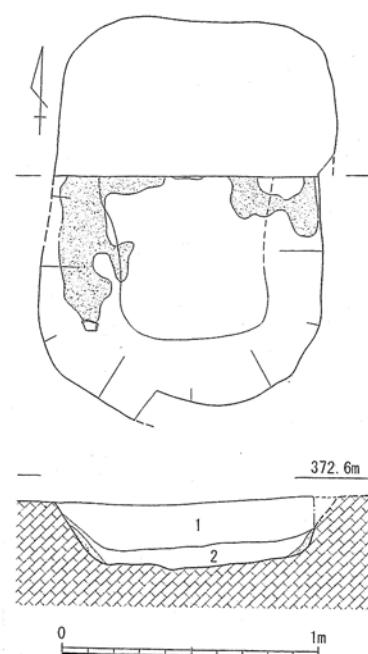
III区出土鍛冶関連遺物



1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭・鉄滓含む
2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 炭含む



鍛冶炉 4



1 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)
2 灰黄褐色細砂 (10YR4/2)
炭多く含む、焼土少し含む



I区土坑 5

図1 鬼ノ城の鍛冶工房

房で製作された確実な「製品（未製品）」の出土品はないが、鬼ノ城築城期に操業されていることから、①袋状鉄斧などの伐採具・木材加工工具、②鑿などの鍛冶具・石工具、③鉄釘などの建築具が主体であったと推測されている。城内全体の出土品を見渡しても確実な武器類の出土品はなく、状況証拠から見ても工具・建築具が主要な製品であったことが認められる。

本研究では、報告書で述べられている「官営工房」や「工具・建築具製作」の仮説を補強するものとして、土坑として報告されている「製炭土坑」に注目したい（小嶋 2012a・2013）。

総社平野周辺の製炭遺構は、古墳時代以来の伝統を引き継ぐ「横口付炭窯」と飛鳥時代以降に列島規模で拡散する「方形製炭土坑」で構成される（図2）。7世紀後半以前に操業された方形製炭土坑の類例は、東北地方の製鉄遺跡（武井・金沢地区）や大宰府周辺の製鉄遺跡（佐野地区）で見られ、日本列島の東西で確認できる。製鉄技術・築窯製炭技術とともに非築窯製炭技術（坑内製炭技術）についても国家主導の技術移植の存在を認めてよい。鬼ノ城城内で操業された方形製炭土坑も、国家主導の技術移植に連なるものと評価でき、「官営工房」の構成要素の一つと把握できる。

鬼ノ城跡で検出された方形製炭土坑は、城内の各所で散発的に操業される状況にある。層位的検出から平安時代以降の操業事例（V区土坑59等）も含むが、飛鳥時代に操業された事例（IV区土坑49等）も確実に認められる。7世紀後半に築造されたIV区土手状遺構2の地山直上で炭層（最下層）が確認できる点も、当該期の木炭生産の存在を傍証する。築城時の山林（未開発の山林）で操業された飛鳥時代の製炭土坑は、山林の伐採・下草刈りの一環で操業されたと見るのが自然であり、鬼ノ城の整備と連動する木炭生産は、城内の官営工房の燃料供給を担ったと考えられる。つまり、木炭の主要な消費対象である鍛冶工房は築城作業と併行して操業されたと見られ、目下の消費対象となる「工具・建築具」を主要な製品とした可能性が高い。

以上のように、鬼ノ城跡で確認された鍛冶工房で兵器生産が主体的になされた可能性は低く、城内に存在したと見られる兵庫に蓄えられた兵器は、基本的に城外から「製品」の状態で搬入されたと判断できる。

（2）古代山城と大宰

次に問題となるのが、城外から持ち込まれた「製品」としての兵器の実態である。この検討に先立ち、まずは古代山城の築城・管理組織について整理したい。上記で検討した鬼ノ城は、その築城責任者を吉備大宰とみる説が有力視されているが、現状では文字史料を欠くために論証に限界がある。これに対し、同じ大宰である筑紫大宰については、奈良時代以降も「大宰府」として存続しており、水城・大野城・基肄城を核とする大宰府都城の管理組織は文字史料から検証できる。

大野城・基肄城は、『続日本紀』文武天皇2年（698）5月25日条に「令大宰府繕治大野。基肄。鞠智三城。」と記され、肥後の鞠智城とともに大宰府による繕治対象であったことが分かる。また、8世紀第2四半期以前に埋没した大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区）SD2340出土木簡の「為班給筑前筑後肥等國遣基肄城稻穀隨大監正六上田中朝臣□」の墨書きからは、大宰府による大野城・基肄城の運営実態がうかがえる（九歴 2014b）。天平神

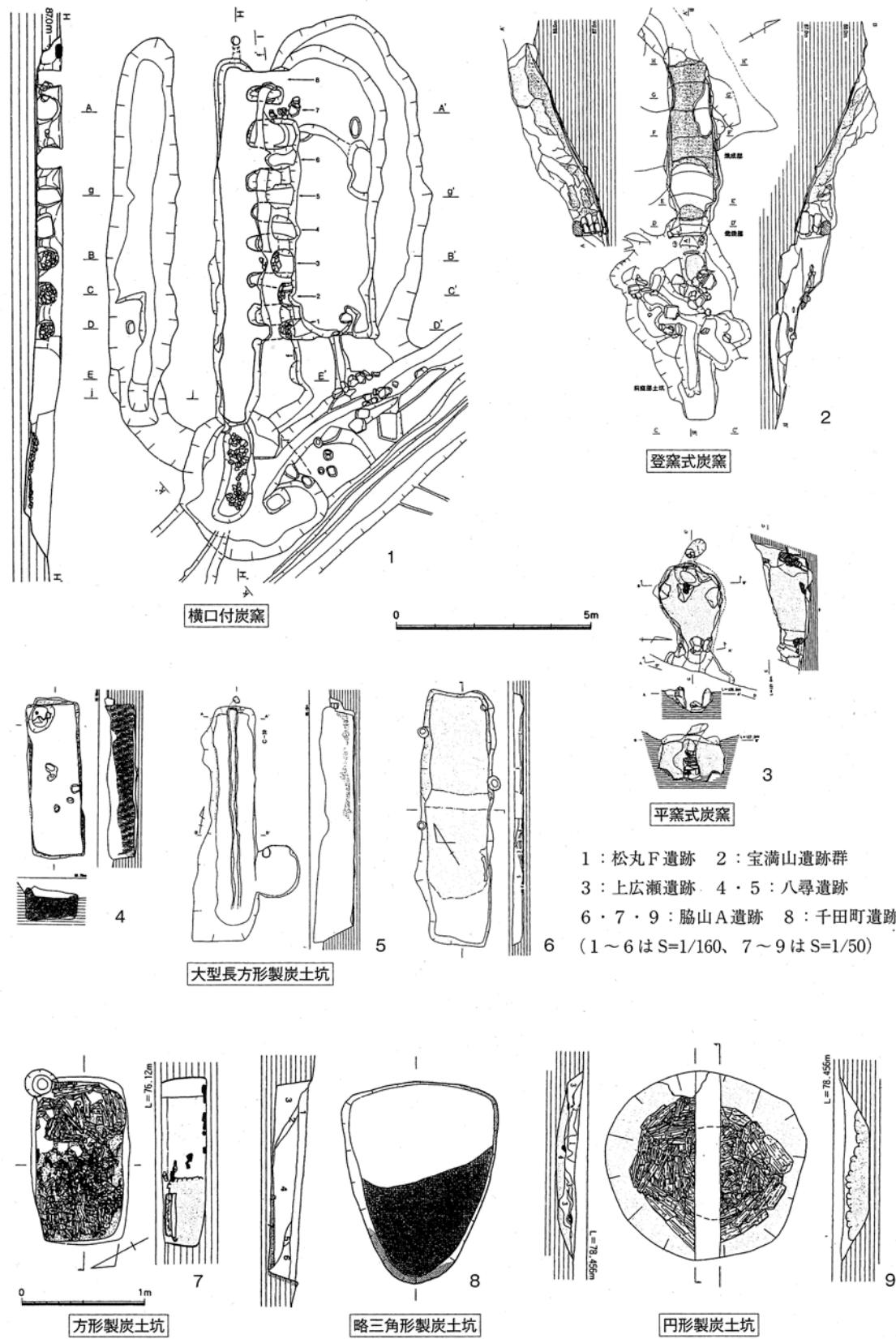


図2 製炭遺構の分類

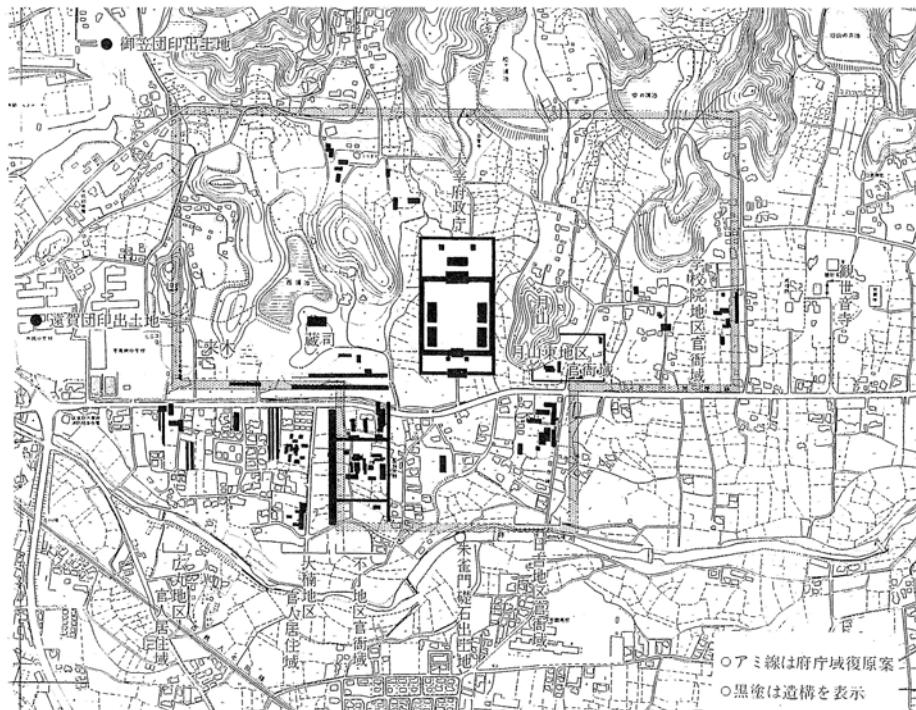


図3 大宰府政庁周辺官衙跡

護元年（756年）段階では怡土城築城と水城修理は、大宰大式や少式の指揮の下で大宰府上番の軍団兵士が動員されたと考えられている（松川2012）。このように、平時における大宰府都城は大宰府の管理下にあり、大宰府都城の兵庫には大宰府保有兵器が備蓄（管理）されていたと考えられる。また、戦時の律令軍団は朝廷からの「勅」を経て編成されるが、当然、大宰府都城の防衛に際しては大宰府保有兵器の使用を構想していただろう。

近年の大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区・蔵司地区）の発掘調査により、大宰府跡出土兵器の数量は急激に増加した（九歴2012・2013）（図3）。発掘調査での出土量もすでに膨大な量となっているが、いまだ地中に眠る埋蔵量も含めると、まさに「桁違い」の量の兵器が大宰府政庁の隣接地に集積されていたことは紛れもない事実である。つまり、豊富な資料数に基づいて、大宰府都城に備蓄された兵器（城内に持ち込まれた兵器）の実態に迫ることが可能である。

（3）大宰府保有兵器の検討

大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区・蔵司地区）で出土した鉄製品は、高温度の被熱痕跡があり、製品としてのおおよその形状を残しつつも、大半が半溶解のような形態で出土する（小嶋2014b）（図4・5）。被熱原因の特定は現在も継続中であるが、鉄鏃が軸を揃えた状態で束のまま（保管形態のまま）被熱すること等から、遺物観察の所見では「兵庫火災」が有力な仮説となる。被熱時期は鉄製品と同時に被熱した瓦（被熱瓦）や鉄製品含有瓦の存在、被熱鉄製品包含層・遺構の検討から8世紀後半～10世紀の期間に絞られる。また、後述するように被熱鉄製品は7世紀後半～8世紀前半の時期に製作されたものを多量に含んでおり、長期間におよぶ兵器の備蓄が認められる。7世紀後半～8世紀前半は古代山城の築城・整備が頻発した時期と重複しており、同時代資料としても注目できる。以下では、大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄製品のうち、兵器に限定して種類毎に様相を整

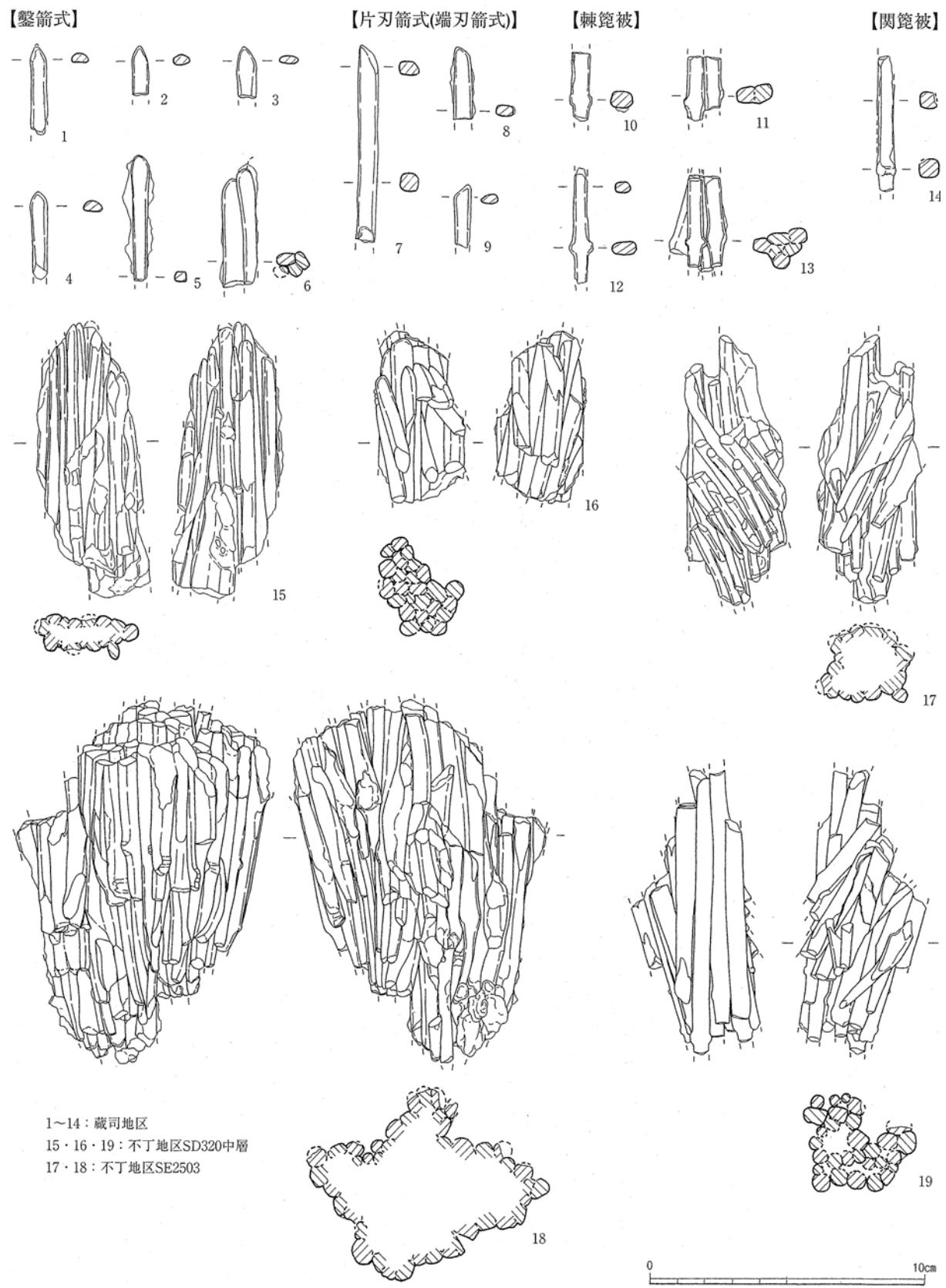


図4 大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鐵鎗

理する（小嶋 2014b）。

【矢（鉄鏃）】 鉄鏃は小片も含めて出土量が最も多い。鉄鏃は尖根系長頸鏃が主体であり、平根系鉄鏃はごく少量が確認できる。刃部形式を列挙すると、尖根系長頸鏃は柳葉式・三角形式・鑿箭式・鑿根式・片刃箭式・端刃箭式の6種類がある。平根系鉄鏃は三角形式と思われる資料が断片的に見られるのみで、方頭式や飛燕式等は現状で確認できていない。

鉄鏃組成の主体となるのは鑿箭式長頸鏃であるが、片刃箭式・端刃箭式長頸鏃の数量も多い。片刃箭式長頸鏃は刃部にわずかに刃闊を有する。完形品の出土事例はなく、現状で最も残りの良い資料は溝 S D 320 中層（大宰府史跡第14次調査）出土の被熱鉄鏃束である（九歴 2013）。本資料は約30個体の鉄鏃が溶着した資料であるが、1個体の鑿箭式長頸鏃が刃部先端から笠被（棘笠被）まで残る。これを見ると、刃部先端から笠被までの長さは9.4cmで、茎部も含めた鉄鏃全長はおよそ12.5cmに復元できる。笠被形態は大半が棘笠被で構成されており、わずかに関笠被を含む。

鉄鏃以外の矢の部材は、被熱により大半が焼失している。矢柄は溶解した鉄鏃に取り込まれる形で、断片的に確認でき、いずれも軸を揃えた状態で束ねられていた痕跡が認められる。燃焼しやすい矢羽根は、現状で未確認である。

【弓（弓金具）】 弓金具は、弓の弭に近い部分に取り付けられる「両頭金具」が複数確認できる。出土した両頭金具は全長2.4～2.8cmで総じて小型品が多い（小嶋 2012b）。花弁状に開く皮金具の折り返し部分は切り込みが密で6～12枚に開く資料が目立つ。

両頭金具は「矢を射る」際に負荷がかかる弓の弭付近に取り付けられており、弓の本質的機能を支える耐久性や弾力性に悪影響を与える付属部品である。このような構造から、両頭金具は「矢を射る」という弓本来の役割とは無関係で、弓の装飾部品の一つとして認知されている。また、芯金具は完全に固定されておらず、「矢を射る」際に振動する構造となる。両頭金具付属弓を用いた人々は、振動による音響に何等かの意義を見出していたのだろう^(註1)。

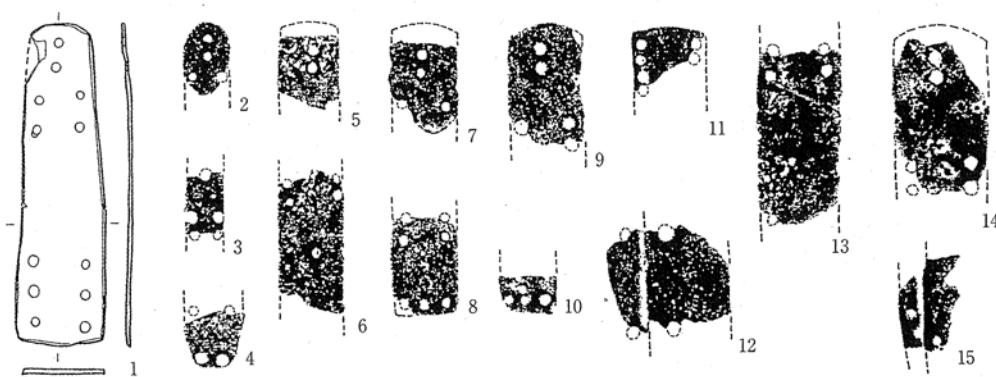
両頭金具は古墳時代後期（6～7世紀前半）の横穴式石室から数多く出土する。古墳副葬品という特殊性はあるが、古墳に副葬された兵器は基本的に実用品で構成されるため、両頭金具付属弓は古墳時代後期の実用弓（儀礼的行為を含む）の一角を担っていたと考えられる。しかし、古墳の薄葬化が進んだ7世紀後半になると出土数は急激に減少する。飛鳥時代以降の兵器を大量に含む東大寺正倉院宝物の「弓・梓弓」にも、両頭金具は確認できない。つまり、時系列で見れば、大宰府政庁周辺官衙跡出土両頭金具は最新相（旧式兵器）に位置づけられる資料群となる。

両頭金具が取り付けられていた弓本体は焼失しており、両頭金具付属弓の個体数は不明である。当然、金属部材を付属しない弓は部材がすべて焼失し、痕跡すら残さない個体が存在する。奈良時代の武装全体から見れば、両頭金具付属弓は旧式兵器に属し、その数量も少量であったと見られる。

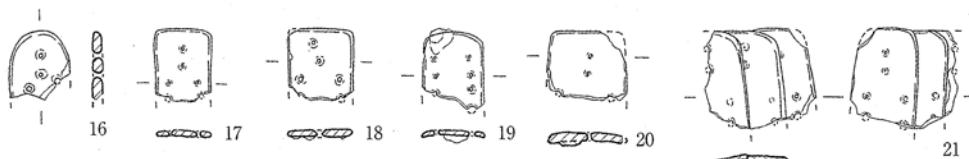
【鉄刀・刀子】 鉄刀・刀子は、刀身や茎部の一部と思われる破片を数点確認している。鉄刀・刀子は刀身をはじめとした金属製部材が主体となるにも関わらず、破片数は限定的である。大宰府保有兵器に占める数量は少なかったと判断できる。

【甲冑（鉄製小札甲）】 現在確認している甲冑は「鉄製小札甲」のみで、その構成部材で

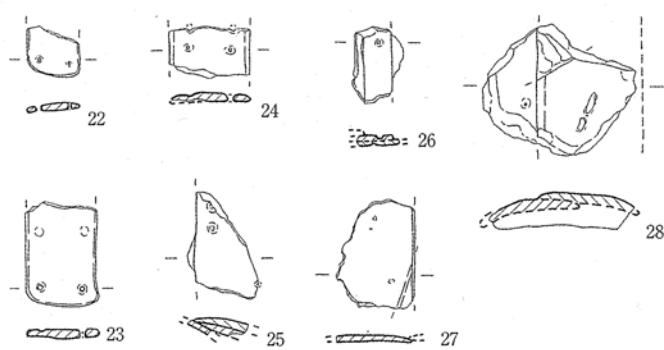
【鉄製小札】



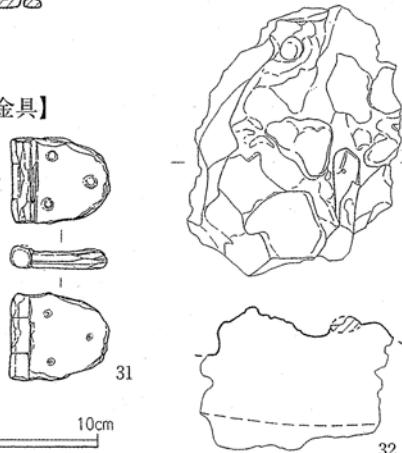
【両頭金具】



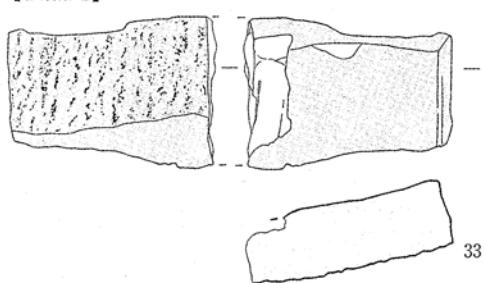
【鉄塊】



【鍛金具】



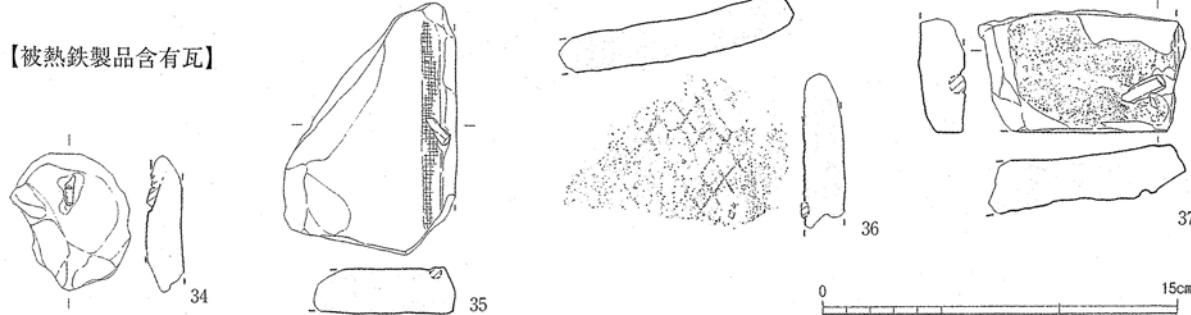
【被熱瓦】



0 10cm

1：玉泉大梁氏採集品
2~15：中山平次郎氏採集品
16~37：藏司地区発掘調査出土品

【被熱鐵製品含有瓦】



0 15cm

図5 大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鐵製品・被熱瓦・被熱鐵製品含有瓦

ある鉄製小札の破片が膨大に出土している。蔵司地区の発掘調査で出土した小札はすべて小片であり、全体が残る資料はない。唯一の完形品は、玉泉大梁氏が昭和8年9月に蔵司で採取した資料（九州大学玉泉館蔵「玉泉館4104第9之70」）で、非円頭の小札で緘孔一列配置のものである。小札の組成識別や時期判別に有効な属性の一つである札幅に注目すると、出土した小札は札幅を基準に小型（1.0～1.3cm）、中型（1.6～2.1cm）、大型（2.3～2.9cm）に大別できる。中山平次郎氏や玉泉大梁氏の採集資料を含め、緘孔と綴孔配置で細分すると、小型小札は緘孔一列配置1種類と緘孔二列配置1種類、中型小札は緘孔一列配置5種類と緘孔二列配置1種類、大型小札は緘孔一列配置1種類と緘孔二列配置1種類の計10種類を確認している。このうち、中型小札には第三緘孔や札端に綴孔が寄る資料が見られる。

小札も被熱の程度に個体差が認められ、ほぼ本来の形状を保つ資料から、著しく歪んだ資料まである。鉄鏃と同様に、型式差による被熱の程度の違いは認められない。また、小札が他個体と溶着する場合は、綴孔同士が重なった状態で軸を合わせている。綴紐で綴じられた状態を残す資料は複数確認できるため、小札は一度製品（甲冑）に組み上げられた後に被熱したと判断できる。ただし、綴紐や緘紐などの有機質部材はすべて焼失している。
【馬具】 引手の断片と思われる資料をわずかに確認している。いずれも半溶解状態で遺存しており、一部の資料の表面に縁錆が見られる。鉄刀・刀子と同様に出土数量は少ない。

（4）大宰府保有兵器の実態

出土資料から兵器の備蓄の裏付けがとれるのは、弓矢である。矢（鉄鏃）は軸を揃えて、かつ同一部位付近で溶着していることから、束ねられた状態で被熱したと判断できる。資料の遺存状態は、まさしく「兵器の備蓄」に相応しい。矢と対となる弓は、両頭金具の存在から備蓄対象であったことが確認できる。ただし、両頭金具付属弓が大宰府保有弓の主体であったとみるのは早計であり、両頭金具を付属しない弓の数量の方が多かったと見る方が妥当であろう。無論、弓の全長は不明だが、東大寺正倉院に納められた弓の全長から2m前後の「上長下短の長弓」が用いられたと考えられる。甲冑も複数種類の鉄製小札の存在から、出土資料から兵器の備蓄を認めてよい。鉄製小札は希少価値の高い武具であり、その備蓄主体が大宰府であるのを示す状況証拠の一つでもある。弓と同様に甲冑についても、有機質素材（木製・革製）の甲冑の存在を想定する必要がある。同じく、旗や鼓などの指揮具についても、有機質素材が主体であったと想定でき、備蓄されていたものが焼失した可能性は十分にある。

以上のように、有機質素材の焼失という資料的制約があるものの、弓矢・甲冑は考古資料から兵器の備蓄が実証できる。戦闘時の消耗品である「矢」の備蓄数が最も多く、長距離戦闘用の兵器である「弓矢」が大宰府保有兵器の主力であったと認めてよい。近距離戦闘用の兵器には、鉄矛等の長柄武器、鉄刀・鉄剣があるが、出土品は少ない。近距離戦闘用の兵器の備蓄場所（兵庫）が異なっていた可能性を残すが、現状の出土数では備蓄を肯定することはできない。とくに、『軍防令』で兵庫での保管が義務づけられている長柄武器の備蓄実態は、古代山城の守衛を考える上でも重要な研究課題である。同じく『軍防令』では、兵士各自が使用する基本装備（弓一張、弓弦袋一口、副弦二条、征箭五十隻、胡籠一具、太刀一口等）は「自備」することも規定されており、鉄刀・鉄剣は兵士個人の装備

に依存していたのだろうか。

結論を述べると、大宰府では遠距離戦闘を想定した兵器（弓矢）の備蓄を行っており、とくに消耗品である「矢」の備蓄に重きを置いていたことが分かる^(註2)。当然、大野城をはじめとした大宰府都城の防衛では、遠距離戦闘を基本戦術としていたと判断でき、古代山城の兵庫に搬入されていた兵器も「弓矢」が主体であった可能性が極めて高い。なお、韓半島の古代山城では、弓用の鉄鎌に混じって、弩用（携行型・設置型）の鉄鎌も出土するが、大宰府都城周辺の出土品にはその類似品は認められない^(註3)。律令国家形成期以降は弩や綿襤甲をはじめとする新式武装の導入が図られる一方で、基本装備は古墳時代の武装を継承していることが指摘されている（津野 2011）。大宰府保有兵器の主力である弓矢も、古墳時代に流行した両頭金具付属弓や棘籠被の長頸鎌（7世紀）を多量に含んでおり、様式継承だけでなく備蓄兵器自体も継承する実態が伺える。

古代山城は韓半島での軍事活動を通じて、7世紀にはじめて日本列島に導入された防衛施設である。古墳時代の戦略では恒常的な防御施設の設置概念は希薄で、古代山城の出現には従来の戦略との断絶面を認めることができる。その一方で、実際の戦闘では古墳時代以来の武装を用いた遠距離戦闘を継続しており、古墳時代の戦術との連続面も評価しなければならない。考古資料として確認できる兵器から古代山城を眺めたとき、戦闘面での「日本化」という視点が見出せるのである。そこで、以下では『日本書紀』記載の戦争記事を基に、戦時下における古代山城の戦略・戦術について検討する。

2. 古代山城と戦争

（1）『日本書紀』から読み取る内容

『日本書紀』を取り扱うにあたり、発表者の認識を改めて明らかにしておきたい。

『日本書紀』は神代より持統天皇11年（698年）8月にいたる歴史書である。天武朝から編纂が開始され、『続日本紀』の養老4年（720年）5月21日の「日本紀」奏上の記事で完成日時が確認できる。本書は編纂時における社会的習慣・合理的解釈・文章表現が、意識的・無意識的に反映されている。本研究で対象としている戦略・戦術についても例外ではなく、奈良時代以前（720年以前）の合理的思考を反映した記述であることをふまえる必要がある。また、当然であるが、考古資料と異なり文献史料は、執筆者をはじめとした恣意的編纂が想定される。古代山城の戦略・戦術を探る上で、卷28「壬申紀」の記事は大いに参考となるが、天武朝の正統性を語るという点で壬申紀の記述は一貫しており、編纂側の政治的意図は確実視できる（早川 2009）。ただし、「多数の関係者が想定されるようなケース（戦いなど）においては、文飾・潤色はあっても、争乱のなかの事件そのものの「造作」は不可能に近い」と把握できる（早川 2009）。いずれにせよ、古代山城が運用されていた時代に編纂された同時代の歴史書である点は重要であり、同時代人の戦略・戦術に対する合理的思考を探る上での基本文献となる。

（2）『日本書紀』記載の戦略と戦術

以下では、『日本書紀』に記載された集団戦闘（暗殺・決闘を除く）を網羅的に整理し、種類ごとに概要を記す（表1～4）。本文中に記した『日本書紀』の引用記事は、宇治谷猛氏による現代語訳に依った（宇治谷 1988）。集団戦闘の分類にあたっては、原則的に

記載単語を反映しているが、文面に対する解釈が加わっていることを明記しておく。

【防御施設の包囲（焼き討ち）】『日本書紀』記載の集団戦闘の大半が「皇位継承」に関わることもあり、皇子や大臣の館・寺院の包囲が中心となる。代表的な事例は、安康天皇没後の雄略天皇の挙兵記事で、円大臣の家を包囲した後に焼き討ちを行っている。また、戦端は開かれなかったが、用明2年4月2日の記事では、物部守屋大連と蘇我馬子大臣がそれぞれの館に兵を集めると記されている。館を防御施設とした最たる記事は、皇極3年11月の蘇我大臣蝦夷と入鹿の館が挙げられる。甘檜岡では「家の外にとりでの柵を囲い、門のわきに武器庫を設けた。家ごとに用水桶を配置し、木の先にかぎをつけたもの数十を置き、火災に備えた。力のある者に武器をもたせ常に守らせた」と記し、畠傍山の東の家では「池を掘ってとりでとし、武器庫をたてて矢を貯えた。常に50人の兵士を率いて護衛させ家を出入りした」と記す。本記載は蘇我氏の専横を記述する内容であるが、館の軍事的拠点化に対する認識が読み取れる。また、皇極4年6月12日の蘇我入鹿殺害に際しては、中大兄皇子は法興寺に入り、とりでとしたとの記載がある。

このように、古墳時代から飛鳥時代の集団戦闘に際しては、本質的には生活空間や儀礼・宗教空間となる宮・館・家・寺を短期的な軍事施設として利用していたことが伺える。とくに古墳時代では徵兵に当たり、血縁集団・部民集団が核となっていることからも、館が兵の集結場所として利用される基本構造があったと見られる。館の軍事拠点化に伴って、自ずと集団戦闘の最終局面が館の包囲となる事例が多いようだ。また、包囲に続いて、焼き討ちの記載記事が目立つ。

【交通路の封鎖】天武元年の「壬申の乱」や神武即位以前の「神武東征」を中心に記載が多い（図6）。壬申の乱の戦局を左右したとされる不破道の封鎖が代表的な事例となる。不破道の封鎖は、6月22日の大海人皇子の命に基づいて実施され、6月26日に村国連男依より美濃の軍勢3,000人で封鎖したとの報告が上がっている。その狙いについての明確な記述はないが、①行軍阻止、②物流掌握に対する戦略と解釈する。また、不破道の封鎖により近江朝の使者（駿使）である書直薬、忍坂直大麻呂の捕縛を果たしていることから、③情報掌握（情報封鎖）も狙いの一つであったと見られる。

なお、繼体8年3月の記事では韓半島南部での戦乱において、伴跪が「城を子呑と帶沙に築いて、満奚と結び、のろし台・武器庫を設け、日本との戦いに備えた。また城を爾列比と麻須比に築いて、麻且奚・推薦封につながるようにした」との記載がある。城を基点に周辺地域の交通路を掌握したかのような記載内容で注目できる。なお、同年4月の記載では物部連率いる水軍500が帶沙江に進軍するが、伴跪の襲撃を受けて敗走している。

【会戦・陣地戦】軍勢同士が特定地域を戦場として対峙した事例では、繼体22年11月11日の筑紫三井郡の戦い（筑紫国造磐井の乱）や天武元年7月22日の瀬田の戦い（壬申の乱）等が著名である。海上での会戦は、天智2年8月28・29日の白村江の戦いが唯一の事例となる。『日本書紀』記載の集団戦闘は、原則的に戦局を左右するような大規模戦闘を軸に記述されていることもあり、偶発的な遭遇戦の記載は乏しく、両陣営が河川（渡河地点）を挟んで対峙する陣地戦が記載の中心となる。先に挙げた瀬田の戦いでは、瀬田橋の西岸に近江軍が陣営を構えており、渡河地点となる瀬田橋が最大の激戦地として描写されている。

河川（渡河地点）が戦場となる頻度が高い要因には、①交通の要所であること、②進軍

速度が遅くなること、③行軍路（渡河地点）が限定されること等が挙げられ、迎撃地点としての利点を多く有するためと考えられる。また、河のほとりや港での陣営・兵の集結記事も散見され、④集結・屯営が容易な平地が確保できること、⑤守衛に適していること、⑥飲料水を確保できること等が挙げられる。以上の点から、古代山城が運用された時点においても、河川（渡河地点）や港に対する戦略・戦術面での合理的思考が存在したと判断する。なお、『続日本紀』に記された「藤原広嗣の乱」においても、天平12年10月9日の大野朝臣東人の言上で、「逆賊の藤和広嗣が一万騎ばかりの衆を率いて、板櫃川に到着しました。広嗣は自ら隼人軍を率いて先鋒となり、木を編んで船をつくり、まさに河を渡ろうとしました。そのとき官軍の佐伯宿禰常人と安倍朝臣虫麻呂とは、弩を放ってこれを射たので、広嗣の衆は却いて河の西に引きあげました。常人は軍士六千余人を率いて河の東に陣をしき、・・・（後略）（宇治谷 1992）」と記述されており、渡河を狙った迎撃と河川を挟んだ陣地戦が展開されている。

では、陣地戦の具体像はどのようなものだったのか。その様相を探れる記述として、天武元年7月2日の古京守衛記事が注目できる。荒田尾直赤麻呂は古京の防衛に際し、「道路の橋の板をはいで楯に造り、京の街のあちこちに立てて守り」としている。この楯は古墳時代の楯形埴輪等に表現される「置盾」の代替品と解釈できる。置盾を用いた陣地戦については、岡安光彦氏の研究成果が大いに参考となる。壬申の乱における兵器と兵士の檢

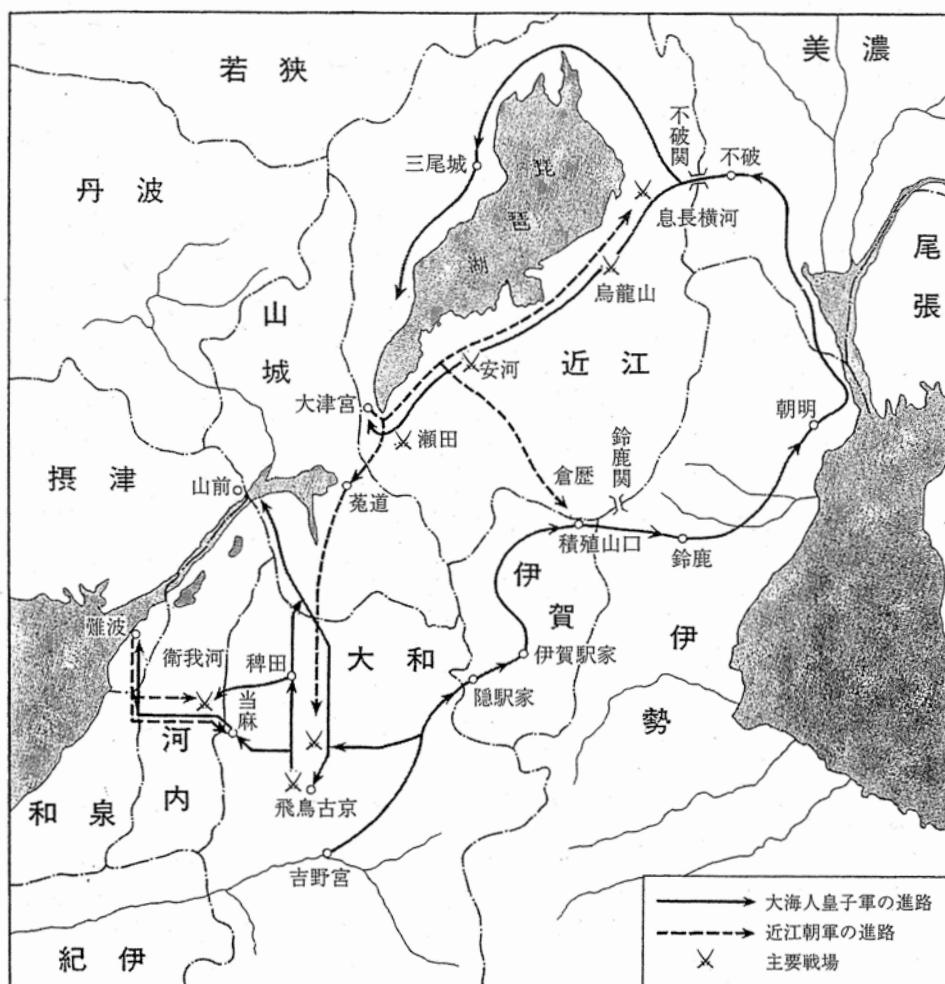


図6 壬申の乱関係地図（篠川2013より引用）

兵器の様相から見た古代山城

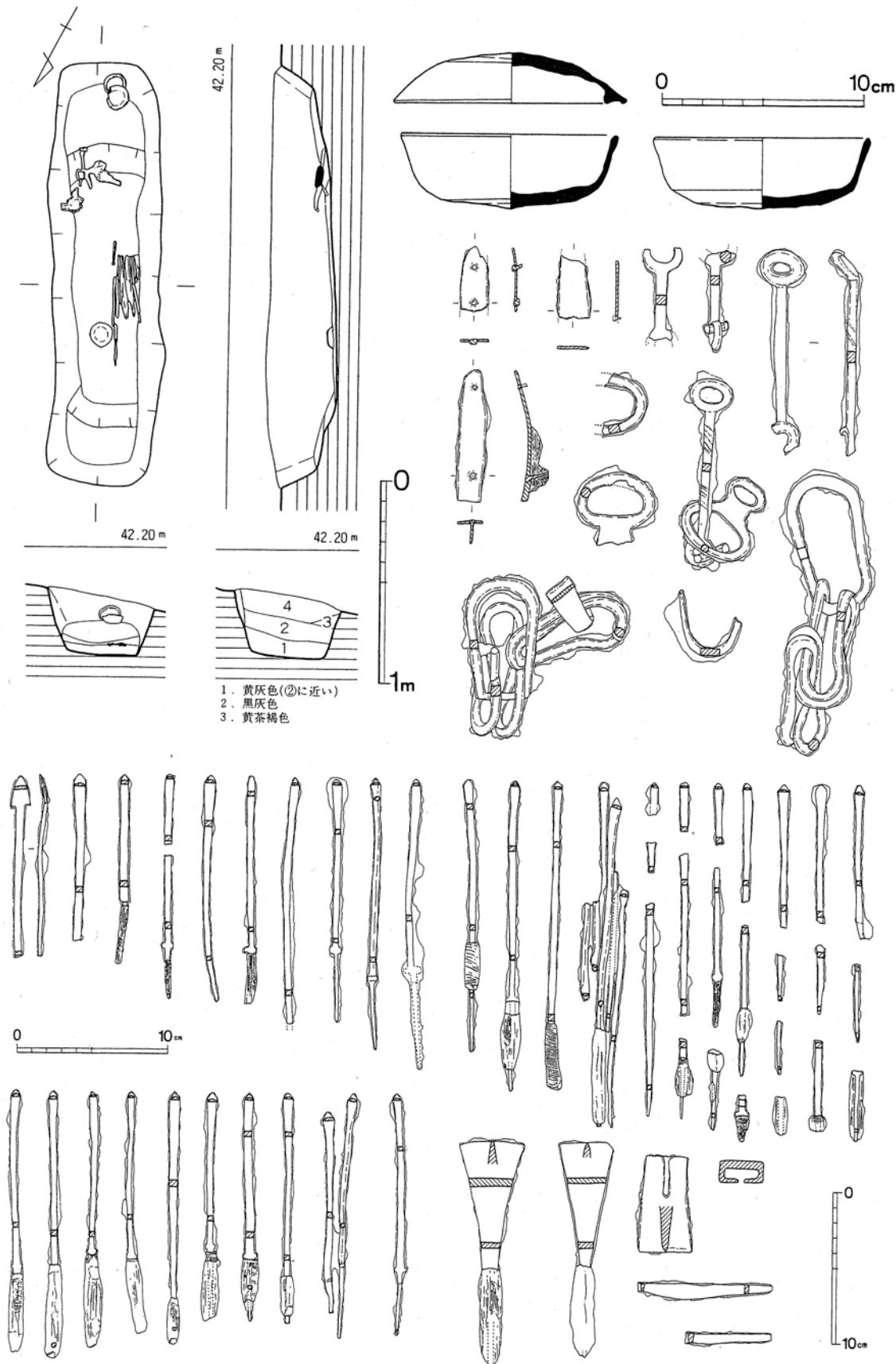


図7 津古生掛2号土坑墓

討から、乱に動員された主力兵士を軽装弓兵と識別し、「一つの置盾を数名が共有する陣地戦」が主体的な戦闘形式との見解を示した（岡安 2013）。天武元年 7 月 22 日の瀬田の戦いにおける近江軍陣地の描写は詩的表現が強いが、「打ちならす鉦鼓の音は数十里にひびき、弓の列からは矢が雨の降るように放たれた」と記載され、陣地戦における遠距離戦闘の光景が思い浮かぶ。

【突撃・追撃】 戦局を左右する突撃については、歩兵による突撃と騎兵による突撃の 2 種類が確認できる。歩兵による突撃は、天武元年 7 月 22 日の瀬田の戦いにおける大分君稚臣の活躍が筆頭に挙げられる。壬申の乱における最大の激戦地である瀬田橋において、大分君稚臣は「矛を捨て鎧を重ね着して、刀を抜いて一気に板を踏んで渡った。板につけられていた綱を切り、射られながらも敵陣に突入した。」と記述され、渡河地点である瀬田橋の突破により近江軍は総崩れとなった。

騎兵による突撃では、天武元年 7 月 2 日の記事に「当麻の村で、壱伎史韓國の軍と、葦池のほとりで戦った。このとき勇士来目という者があつて、刀を抜き、馬を駆け、軍の中に突入した。騎士が後から後から進んだ。近江軍はことごとく逃げ、追っかけて大いに斬った。」と記されており、騎兵による突撃により戦局を決している。なお、壬申の乱で活躍した騎兵は東国騎兵を中心に、軽装弓騎兵が主力であったと考えられている（岡安 2013）^(註4)。

追撃に関する記述では、上記の記事の他に壬申の乱勃発直後の近江朝の対応記事が注目できる。群臣の一人が「速やかに騎馬隊を集めて、急追すべき」と進言しており、騎兵の用兵方法に対する認識が伺える。この進言は実行されなかつたが、天武元年 7 月 4 日の奈良山の戦いでは、大伴吹負を敗走させた大野君果安の追撃記事も見られる。

【奇襲（夜襲）・伏兵】 奇襲（夜襲）の記述で最も詳細なのは、天武元年 7 月 5 日の近江軍の田辺小隅による奇襲である。「鹿深山を越え、人に知られぬよう、旗を巻き鼓を抱いて倉歴についた。夜中、枚を含み、城柵をくずし、にわかに田中臣足麻呂の陣営の中に入った」と記述され、奇襲（夜襲）を描写する意図が明確に読み取れる。同じく、天武元年 7 月の廬井造鯨率いる 200 の精兵による大伴吹負陣営の襲撃も奇襲の範疇に含まれようか。

伏兵については、上述した不破道の山中での書直薬、忍坂直大麻呂の捕縛がある。この際には、山中に伏兵を配して、退路を遮断する様子が記されている。また、古くは安康 3 年 10 月の三輪皇子の捕縛時に「不意に途中に伏兵があり、三輪の磐井のほとりで合戦となつた」との記述が見られる。

（3）『日本書紀』に記された古代山城の戦闘

『日本書紀』には壬申の乱の際に利用された古代山城として、三尾城と高安城の二つの城の記述がある。三尾城の遺構は未発見の状況にあり、比定地として大津京北方の湖東地域（高島郡三尾）が挙げられる。壬申の乱では、羽田公矢国・出雲臣泊によって攻め落とされたとの記述があるが、記載が簡素なために戦闘の詳細は不明である。なお、同日に瀬田の戦いの勝敗が決しており、大友皇子を中心とする近江軍の主力は瀬田橋西岸に着陣する状況にあった。

高安城は、奈良盆地と大阪平野に挟まれた高安山に築かれた古代山城である。壬申の乱における大和・河内の戦場は、奈良山や飛鳥上道・中道・下道等で展開しており、三尾城

と同様に主戦場として利用されていない。以下に高安城に関わる記述を記す。

「これよりさき將軍吹負は奈良に向かって、稗田にいたったとき、ある人が「河内の方から軍勢が沢山やって来ます」といった。吹負は坂本臣財・長尾直真墨・倉牆直麻呂・民直小鮎・谷直根麻呂に、三百の兵士を率いて、竜田を守らせた。また佐味君少麻呂に数百人を率いて、大坂に駐屯させた。鴨君蝦夷に、数百人を率いて石手道を守らせた。この日、坂本臣財らは平石野にやどったが、近江軍が高安城にいると聞いて山に登った。近江軍は財らがくると知って、税倉をことごとく焼いて、皆散り逃げた。それで財らは城の中で夜をあかした。明方西の方を望見すると、大津・丹比二つの道から、軍勢がたくさんやってくる旗が見えた。だれかが「近江の将壱伎史韓國の軍である」といった。財は高安城から下って、衛我河を渡り、韓国と河の西で戦った。財らは兵が少なくて防ぐことができなかつた。」

大伴吹負が河内からの近江軍の侵攻を防ぐにあたり、重要視しているのは交通路の封鎖であり、大和への進入路に各軍勢を配している。高安城は竜田の封鎖に向かった坂本臣財らにより攻略されているが、同員数は最大でも300名と少ない。また、近江軍は坂本臣財らと交戦する前に逃散しており、不確実ながら守衛していた近江軍の兵数も少数であったことが想定できる。税倉を燃やしている点を評価すれば、戦略面での兵糧に対する認識が伺える。重要なのは、高安城を占拠した坂本臣財の対応であり、城内からの眺望により河内方面の近江軍の動向を把握し、近江軍の迎撃へと向かっている点である。高所からの軍勢の把握は、古代山城を利用した基本戦術であったことが伺える。高所からの軍勢の把握は、大和の主戦場の一つであった奈良山の戦いでも認識でき、大伴吹負を敗走させた大野君果安は高所から古京を眺めて伏兵の有無を探っている。

また、直接的に古代山城と関係しないが、百済復興運動における朴市田来津の進言も注目でき、「避城と敵のいるところは、一夜で行ける道のりです。たいへん近い。もし不意の攻撃を受けたら悔いても遅い。飢えは第二です。存亡は第一です。今敵がたやすく攻めてこないのは、ここが山険を控え、防御に適し、山高く谷狭く守り易く攻めにくいためです。もし低いところにいれば、どうしてかたく守り動かないで、今日に至ることができたでしょうか。」と記述されている。敵軍勢（拠点）との距離や防衛面での自然地形に対する認識が伺える。

おわりに

前半部では、考古資料を軸に古代山城にどのように兵器を貯え、どのような兵器を用いたのかを検討した。後半部では、文献史料（『日本書紀』）を軸に古墳時代との連続性を意識しつつ、古代山城を運用していた時代の戦略・戦術に対する合理的思考を探った。最後に双方の検討結果を統合して、日本列島に築かれた古代山城がどのような戦闘を想定していたのかについて仮説を提示したい。

戦時下における古代山城は、開戦当初から「戦場（防御施設）」としての利用を想定しておらず、まずは①兵士の集結場所（派兵）、②兵糧・兵器の守衛（供給）、③高所からの敵軍把握としての機能を想定していたと考えられる。主戦場は軍勢の進軍速度が速い交通路（官道）であり、峠（関）や河川（渡河地点）、港（上陸地点）を基本的な迎撃地点としていたことが伺える。迎撃に際しては、置盾を基点とした陣地を構築し、弓矢を用いた

長距離戦闘を主体としていた。戦局は弓矢・弩矢をかいくぐった歩兵・騎兵の突撃に左右され、追撃では騎兵が主体的に用いられたと考えられる。基本装備は兵士各人の自備を原則とするが、消耗品である矢は公的に備蓄が図られていたことは確実である。この備蓄は長期間に及び、飛鳥時代に備蓄を開始した兵器が奈良時代にも運用されていたことが考古資料から裏付けられる。指揮具や長柄武器がどの程度運用されていたかについては、今後も検証が必要である。

迎撃に失敗した際に、はじめて古代山城が防護施設としての運用が本格化する。日本列島における古代山城の具体的な戦闘描写の記録がなく、その運用の実像は依然として論拠に乏しい。現代の合理的思考に基づけば、③高所からの敵軍把握を基に襲撃地点の城門・城壁（土壘）に兵士を集結させることを基本戦術としていたと推測できる。敵軍は進軍速度が遅くなる傾斜地を登るため、敵軍の視認を経た対処的戦闘を想定していただろう。そして、当然ながら④高所からの長距離戦闘が主体であったことは容易に考えられる。

以上、日本列島における古代山城を運用した戦闘を公約数的に描写した。古代山城の研究は、広域的な立地や政治的な戦略面での検討が多く認められるが、各古代山城でどのような戦闘を想定していたのかについては十分な検討がなされていない。考古資料・文献史料・自然地理等を駆使しつつ、具体的な論拠に基づいた研究の深化が求められる。

【註】

註 1：『日本書紀』雄略 23 年の記事に「鳴弦の術を用いて邪氣を払い、浜辺の上で踊り伏しして矢を避けている者二隊を射殺した」とある（宇治谷 1988）。両頭金具付属弓と直結する記事ではないが、古代の戦闘における音響を用いた儀礼行為の存在が伺える。

註 2：大宰府南方に位置する小郡官衙遺跡でも、大宰府政庁周辺官衙跡と同一型式で組成も類似した鉄鎌群が 216 点以上確認できる（小嶋 2014a）。また、これらの鉄鎌群は東大寺正倉院に納められた鉄鎌群とも類似する（小嶋 2014b）。

註 3：古代日本の弩の運用を検討した五十嵐基善氏は、携行型の弩は 7 世紀には積極的に使用された形跡はないとの見解を示す（五十嵐 2012）。また、設置型の弩についても、8 世紀の天平期以降に重視されるようになったと想定している。

註 4：筑紫における軽装弓騎兵の実態は、津古生掛 2 号土坑墓から伺える（図 7）。副葬品は馬具・鉄鎌に加えて、鉄斧や刀子も含み、あたかも兵士自備の基本装備をうかがわせるような内容である。

【参考文献】

五十嵐基善 2012「古代日本の弩に関する基礎的考察—その構造と運用を中心として—」『文学研究論集』第 37 号 明治大学大学院

宇治谷孟 1988 『日本書紀（上）（下）』講談社学術文庫

宇治谷孟 1992 『続日本紀（上）』講談社学術文庫

篠川賢 2013 『飛鳥と古代国家』日本古代の歴史 2 吉川弘文館

岡安光彦 2013 「壬申の乱における兵器と兵士—考古学的検討—」『土曜考古』第 35 号 土曜考古学会

岡山県教育委員会 2013 『史跡 鬼城山 2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236

九州歴史資料館 2012 『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅶ 平成 22・23 年度』

九州歴史資料館 2013 『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ—不丁地区 遺物編 1—』

兵器の様相から見た古代山城

- 九州歴史資料館 2014a 『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ 平成 24・25 年度』
- 九州歴史資料館 2014b 『大宰府政庁周辺官衙跡V—不丁地区 遺物編 2—』
- 小嶋篤 2012 a 「大宰府成立前後の鉄生産—製炭・製鉄・鍛冶・鉄器—」『生産と流通』九州考古学会・嶺南考古学会第 10 回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会
- 小嶋篤 2012 b 「大宰府の弓金具—大宰府史跡・蔵司地区出土の両頭金具—」『都府楼』44 号 古都大宰府保存協会
- 小嶋篤 2013 「九州北部の木炭生産—製炭土坑の研究—」『福岡大学考古学論集 2』福岡大学考古学研究室
- 小嶋篤 2014a 「小郡官衙遺跡出土鉄鏃の研究」『九州歴史資料館研究論集』39 九州歴史資料館
- 小嶋篤 2014b 「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』vol.10 古代武器研究会
- 津野仁 2011 『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館
- 早川万年 2009 『壬申の乱を読み解く』歴史文化ライブラリー 284 吉川弘文館
- 松川博一 2012 「大宰府軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」『九州歴史資料館研究論集 37』九州歴史資料館

表1 『日本書記』記載の集団戦闘1

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	戦術(勝者側)	山城(防衛施設)	備考
神武即位前	4月	9日	孔倉衛坂	長髓彦	神武天皇	一	矢	迎撃	—	生駒山越え
神武即位前	6月	23日	名草邑	神武天皇	名草戸畔(女財)	一	—	—	—	—
神武即位前	6月	23日以後	熊野の荒坂の津	神武天皇	丹厥戸畔(女財)	一	—	交通路の遮断	(要塞の地)	おこし炭
神武即位前	9月	5日	國見丘(女坂・男坂・墨坂)	八十裏帥	八十裏帥	一	—	交通路の遮断	(要塞の地)	—
神武即位前	9月	5日	國見丘	元機城	神武天皇	八十裏帥	女軍・男軍	弓矢・歩駆	製塹→一撃	—
神武即位前	10月	1日	國見丘	神武天皇	神武天皇	一	甲冑	陽刃→一撃	—	炭の火
神武即位前	11月	7日	忍坂・墨坂	神武天皇	神武天皇	一	—	製塹	—	—
神武即位前	12月	4日	長髓周辺か?	神武天皇	神武天皇	一部の軍	甲冑	甲冑	—	—
神武即位前	2月	20日	そぼの黒の荒坂の丘岬	神武天皇	新城兄懶城	一部の軍	—	—	—	—
神武即位前	2月	20日	和睦の荒坂の丘岬	神武天皇	新城兄懶城	一部の軍	—	—	—	—
神武即位前	2月	20日	和睦の荒坂の丘岬	神武天皇	新城兄懶城	一部の軍	—	—	—	—
崇神10年	9月	27日以後	躉見の荒坂の丘岬	五十夷芦彦命	吾田媛	一部の軍	—	—	—	二道から進軍
崇神10年	9月	27日以後	大坂	泰良山	武道安彦	一部の軍	—	—	—	三道から進軍
垂仁5年	9月	27日以後	輪韓河	大彦・彦国壹	武道安彦	—	弓矢・甲	陣地戦→渡河→追撃	河を挟んで陣地戦	稻を積んだ城塞で籠城
景行12年	10月	1日以後	八幡田	猿穗彦	武道安彦	—	包团一火計	稻城	稻を積んだ城塞	—
景行12年	10月	—	稻葉の川上	景行天皇	土蜘蛛(青・白)	—	—	—	—	—
景行12年	10月	—	稻葉山	土蜘蛛(打猿)	景行天皇	—	—	—	撤退後、川の辺に陣	—
景行12年	10月	—	禰姫山	土蜘蛛(打猿)	景行天皇	—	—	—	—	—
景行18年	4月	3日	熊県	景行天皇	弟熊	—	—	—	—	—
景行27年	12月	—	熊襲の国	日本武尊・弟彦	聖師	—	—	—	—	—
景行40年	—	—	佐津	日本武尊	日本武尊	—	—	—	—	—
景行40年	—	—	陸奥国・竹水門	御諸別王	島津津愛・國津神	—	弓矢	会戦	—	竹水門に屯して防戦
景行56年	8月	—	東国	仲哀天皇	蝦夷	—	—	—	—	—
仲哀元年	11月	4日	—	筑紫	蒲見別王	—	—	—	—	—
仲哀8年	—	—	熊襲の国	仲哀天皇	仲哀天皇	—	—	—	—	—
神功皇后元年	3月	20日	層嶋岐野	神功皇后	羽白熊鷦	—	—	—	—	宇治川を挟んで対峙
神功皇后元年	3月	25日	山門具	神功皇后	土蜘蛛(田浦津愛・夏羽)	—	—	—	—	兵を構えて迎える
神功皇后元年	10月	3日	新羅国	神功皇后	新羅王	—	—	—	—	—
神功皇后2年	2月	—	播磨・淡路	魔羅	魔羅	—	—	—	—	凌をつくるまわ
神功皇后2年	2月	—	生吉	忍熊王	忍熊王	—	—	—	—	—
神功皇后2年	3月	5日	宇治	武内宿禰・武振熊	忍熊王・熊之凝	—	櫛弓・鎗矢・真刀	陣地戦→一撃討ち	—	—
神功皇后2年	3月	—	近江の蓬坂・狹狭波・瀬田	武内宿禰	忍熊王	—	—	—	—	宇治川を挟んで対峙
神功皇后5年	3月	—	多大浦・草羅城	臺城襲津彦	新羅	—	—	—	—	—
神功皇后49年	3月	—	卓淳国等	葦原別・鹿我別	新羅	—	—	—	—	—
神功皇后49年	3月	—	比利等	百济王肖古・貴須	比利等	—	—	—	—	—
神功皇后62年	—	—	新羅	斐津彦	新羅	—	—	—	—	—
応神16年	8月	—	新羅	木舟宿禰	大鷦鷯鷦	—	—	—	—	元威
応神41年	2月	—	新羅	先道	大鷦鷯鷦	大山皇子	—	—	渡河製塹→伏兵	—
仁德53年	5月	—	水門	田道	新羅百軒	数百人	—	陣地戦→突撃→追撃	—	左右の軍
仁德55年	—	—	難波・飛鳥山・葦田山	仲皇子	仲皇子	—	—	—	—	—
仁德87年	1月	—	玉田の家	允恭天皇	穴穂皇子	—	—	包围→焼き討ち→伏	—	—
允恭42年	7月	—	物部大前宿禰の家	穴穂皇子	幹太子	—	穴穂矢・軽矢	包围	—	—
允恭元年	10月	2月	大草香皇子の家	安康天皇	大草香皇子	—	—	包围	—	—
安康3年	8月	—	—	雄略天皇	八鈴白彦皇子	—	甲・刀	製塹	—	—
安康3年	8月	—	円大臣の家	雄略天皇	坂合黒皇子・麿輪王・円大臣・坂合部連賀宿禰	—	—	包围→焼き討ち	—	—
雄略7年	10月	8月	三種の磐井のほとり	雄略天皇	三輪皇子	—	—	伏兵→会戦	—	—
雄略8年	2月	—	築足流城	任那王ら	吉備弓削部虚空	物部兵士30人	—	製塹	—	—

表2『日本書記』記載の集団戦闘2

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	戦術(勝者側)	山城(防衛施設)	備考
雄略9年	3月	—	新羅	紀小弓宿禰	新羅王	数百の騎兵	—	包围→追撃	—	—
雄略13年	8月	—	播磨國御井隈	春日小野臣大樹	文石小麻呂	100人の兵士	—	包围→焼き討ち	—	(船をついた砦)
雄略14年	4月	—	日根	物部大金手	根使主	—	弓・楯・二重の甲	陣地戦	—	家を城と表現
雄略18年	8月	10日	伊賀の青墓	物部菟代宿禰・物部目連	朝日郎	—	—	—	—	—
雄略20年	冬	—	百濟	高麗	百濟	—	—	—	—	—
雄略23年	4月?	—	高麗	弟柴の安到臣・馬飼臣	高麗王	—	—	—	—	鳴弦の術
雄略23年	8月?	—	娑婆瀬・丹波国・蒲明の瀬	吉備尾臣代	蝦夷	—	—	会戦→焼き討ち	—	吉備上道臣の船軍
顯宗3年	—	—	大蔵の役所	白髮皇子	星川皇子・吉備稚媛・兄君・城丘前来自	—	—	—	—	帶山城による交通路の掌握
仁賢11年	—	—	帶山城・東道・港	百濟王・古爾解・内頭莫古解	紀生磐宿禰	—	—	—	—	帶山城
仁賢11年	11月	11日	平群真鳥臣の家	武烈天皇・大伴金朴連	鮒臣	数千の兵	—	退路封鎖→包囲	—	—
繼体8年	3月	—	子呑・帶沙・爾列比・麻須比	伴跪	新羅	—	—	包围→焼き討ち	子呑・帶沙・爾列比・麻須比に城	のろし台・武器庫を設け、日本との戦いに備えた
繼体8年	4月	—	肥前・豊前・豊後	肥前・豊前・豊後	物部連	—	—	交通路の掌握→襲撃	—	—
繼体21年	6月	3日	氣紫の三井郡	筑紫國造磐井	毛野臣	60,000	帷幕	襲撃	—	—
繼体22年	11月	11日	肥前・肥後・平城	物部龜鹿火	筑紫國造磐井	—	旗・鼓	海路の遮断	—	—
繼体23年	3月	—	刀伽・古跋・布那牟羅	新羅	加羅	—	—	会戦	刀伽・古跋・布那牟羅・北の境の5つの城	—
繼体23年	4月	—	己叱己利・多々良の原	上臣伊叱夫礼智干岐	近江毛野臣	3,000	—	陣地戦	—	—
繼体24年	9月	—	青都	任那(阿利斯等)・百濟	近江毛野臣	—	—	包围→撤退	久礼牟羅など	1ヶ月の籠城
繼体24年	9月	—	宮廷	任那(阿利斯等)・百濟・新羅	細群	—	鼓	包囲	—	—
欽明天年	12月	甲午	—	詹群	細群	—	—	—	—	1ヒ重複記事
欽明天年	1月	丙午	—	詹群	細群	—	—	—	—	百濟領の拡大
欽明天年	—	—	漢城・平壤	百濟(聖明王)・新羅	高麗	—	—	—	—	新羅領の拡大
欽明天年	—	—	漢城・平壤	新羅	新羅	—	鼓笛、旗、鉢	百濟の塞	—	—
欽明天年	10月	20日	東聖山付近	余昌(威德王)	高麗(王)	—	頭鎧、鉢	火薙・攻城戦	函山城	—
欽明天年	12月	9日	函山城	筑紫物部守暮委少奇	新羅(聖明王)	—	佩刀、鞍、鎧、鎧	火薙・攻城戦	久陀牟羅の塞	聖明王戦死?
欽明天年	—	—	久陀牟羅の塞付近	新羅(苦都)	百濟	—	—	道の遮断	久陀牟羅の塞	余昌(國徳王)脱出
欽明天年	—	—	伽耶地域	新羅	新羅	—	弓矢、鞍、鎧、鎧	火薙・攻城戦	久陀牟羅の塞	聖明王2年か?
欽明天年	7月	—	旧伽耶地域	紀男麻呂宿禰・河辺至瓊岳・施集部首登彌	日本・任那	—	弓矢、鞍、鎧、鎧	火薙・攻城戦	久陀牟羅の塞	新羅戦略的後退
欽明天年	7月	—	旧伽耶地域	新羅(鬪将)	河辺臣瓊石・委國造手彦・調吉土伊企難	—	弓矢	火薙・攻城戦	久陀牟羅の塞	前鋒・日本軍惨敗
欽明天年	8月	—	高麗	大伴連挾手彦・百濟	高麗(王)	—	白旗、矛、刀	後退→陣中突撃	城・堀	前鋒・日本軍惨敗
敏達10年	2月	—	本州?	鄧夷	日本	数万	—	百濟の計?	宮中に侵攻	宮中に侵攻
用明天年	5月	—	誓余・三輪山・後宮	六穗部皇子・物部守屋	三輪君逆	数千	—	—	—	蝦夷首領の縁糸を招集
用明天年	4月	—	河内・大和	物部守屋・蘇我馬子等	—	—	弓矢・皮盾	館の守衛	—	—
用明天年	5月	—	穴穗部皇子の宮	炊屋強尊・蘇我馬子等	穴穗部皇子・宅部皇子	—	弓矢	宮の包囲	宮・楼	5月・物部守屋の離反
用明天年	7月	—	涉河・衣摺	蘇我馬子・厥戸皇子等	物部守屋	—	弓矢	館の包囲	館	高位置からの射撃、簡易防衛施設の設営
用明天年	7月	—	難波・守屋宅・餌香の川原	蘇我馬子	捕鳥部万	数百	弓矢、劍、小刀	包囲	館	川原の死体多数、忠犬伝承

表3『日本書紀』記載の集団戦闘3

年	月	日	戦場	勝者	敗者	兵員人数	兵器	戦術(勝者側)	山城(防御施設)	備考
推古8年	—	—	新羅(伽耶地域か?)	境部臣・穂積臣	新羅	10,000余	旗	攻城戦	多羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南加羅・阿維羅	倭国撤退後、新羅侵攻
推古26年	8月	1日	高麗	高麗	隋(煬帝)	300,000	鼓吹、弩、石弓	—	—	—
推古36年	9月	—	館寺・乾傍山	蘇我蝦夷	境部摩理勢・毛津	—	劍、弓矢	進撃→守備→進撃	館一寺 岩	泊瀬王病死
舒明天年	—	—	閑東?	上毛野君形名	蝦夷	—	—	—	—	—
皇極3年	11月	1日	坂鳩宮・生駒山・坂鳩寺	蘇我入鹿・巨勢恵太臣	山背大兄王	數十人	弓矢	包囲・焼き打ち	宮	—
皇極4年	6月	12・13日	宮・法興寺	中大兄皇子・中臣鎌足・倉山田麻呂臣等	蘇我入鹿・蝦夷・漢直等	—	長槍、弓矢、劍、甲	暗殺→守衛	寺	甘糧圓の家(轍・武器庫・用水桶・守衛兵)、敵傍山東の家(矢・備蓄)・守衛兵
大化元年	9月	12日	吉野山?	中大兄皇子・菟田朴室古・高麗宮知	古人大兄皇子	若干	—	—	—	—
大化3年	3月	24~26日	大至の家・山田寺	中大兄皇子・大伴伯連・蘇我日向臣	蘇我倉山田麻呂	—	舟軍180艘	弓矢	包囲	山田寺
齊明4年	4月	—	秋田浦	阿倍臣	秋田・能代二郡の蝦夷	—	—	威嚇	—	—
齊明4年	11月	5日	有馬皇子の家	蘇我赤兄・物部朴井連鮪	有馬皇子	造営工事 人夫	—	—	家	計画では「大宮を燒いて、500人で一日二夜、半婁津田田辺市(港)に迎え撃ち、急ぎ舟軍で、淡路國をさえぎり、牛屋に囲んだはうにすれば、計画は成り立い」
齊明4年	—	—	廉慎	越国守阿倍引田臣比羅夷・阿倍臣・倭衆の鬪夷・渡島の蝦夷	廉慎	船軍200隻	—	—	柵	—
齊明6年	3月	—	大河のほとり	尾資の津・怒愛利山等	新羅王(春秋候)	百濟王・義慈王	—	—	3日で王城が陥落→百濟復興運動	1,000余人人が河に面して屯營
齊明6年	7月	10~13日	高麗の城下	蘇我平・突厥王子(契丹加力)	—	—	—	—	城	—
齊明7年	7月	—	ソ留城(都々岐留山)	日本・高麗	唐・新羅	—	—	示威	城の守衛	ソ留城(都々岐留山)
天智元年	3月	—	百濟南都4州	新羅	百濟	—	—	—	沙鼻・岐奴山	—
天智2年	2月	—	沙鼻・岐奴山	上毛野君稚子	新羅	—	—	焼き討ち	州柔	—
天智2年	6月	—	州柔	新羅	百濟	—	—	—	—	—
天智2年	8月	17日	白村江	日本・百濟	唐・新羅	—	—	包囲	—	—
天智7年	10月	—	高麗	唐(英公)	唐船170艘	—	—	堅壁→快擊	—	—
天武元年	6月	22日	美濃国安八幡郡	天武天皇	—	—	—	—	—	東宮の食封
天武元年	6月	22~26日	不破道	天武天皇・村国連男依	近江軍	美濃軍勢 3,000人	—	—	兵(部曲の招集)	—
天武元年	6月	24日	飛鳥	天武天皇	天武天皇	—	—	交通路の封鎖	—	—
天武元年	6月	24日	隱郡	天武天皇	近江軍	—	—	駿駒の確保→失敗	—	—
天武元年	6月	24日	伊賀郡	天武天皇	近江軍	—	—	焼き討ち	—	—
天武元年	6月	25日	金輪郡の山道	天武天皇	近江軍	500	—	交通路の封鎖	—	—
天武元年	6月	—	—	—	近江朝	—	—	騎馬隊による追撃	(構想のみ)	—
天武元年	6月	27日以前	不破の山中	天武天皇	草那公鑑歎・書直葉・書直葉	—	—	伏兵	書直葉・忍坂直大麻呂	—
天武元年	6月	27日	方々の道	天武天皇	天武天皇	—	—	交通路の封鎖	—	—
天武元年	6月	29日	飛鳥	大伴連吹負・坂上直熊毛・秦造熊	高坂王・穗積臣百足	数十騎	騎兵・弓・刀	奇襲	小堀田の武器車→近江輸送	—

表4『日本書紀』記載の集団戦闘4

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	駆逐(勝者側)	山城(防衛施設)	備考
天武元年	7月	1日	竜田	坂本臣財ら	300	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策	
天武元年	7月	1日	大坂	佐味君少麻呂	數百人	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策	
天武元年	7月	1日	石手道	鷦鷯君殿夷	數百人	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策	
天武元年	7月	1日	高安城	坂本臣財	近江軍	—	交戦なし	—	兵糧を携いて逃亡。	
天武元年	7月	2日	高安城・衛我河	吉伎史韓国	坂本臣財	—	旗	会戦	高安城	高安城
天武元年	7月	2日以前	櫻坂道	細臣大音	—	—	交通路の封鎖	—	明け方西の方を望見。高安城から下って、衛我河を渡り、韓国と河の西で戦つた。	
天武元年	7月	2日	伊勢→六和	紀臣阿闍麻呂ら	数万	—	増援	—		
天武元年	7月	2日	不破→近江	村國連男依ら	数万	—	進軍	—		
天武元年	7月	2日	刺茨野	多臣品治	3,000	—	駐屯	—		
天武元年	7月	2日	倉歷道	田中臣足麻呂	—	—	交通路の封鎖	—		
天武元年	7月	2日以前	大上川のほとり	山部王ら	数万	—	集結・内紛	—		
天武元年	7月	2日以前	玉倉部村	出雲臣泊	近江軍	精兵	迎撃	—		
天武元年	7月	3日	奈良山	大伴連吹貞	—	—	高所に駐屯	—	奈良山の上に駐屯	
天武元年	7月	3日	古京	荒田尾直赤麻呂・忌部首子人	—	置盾	置盾による守衛	—	橋の板をはいで橋につり、京のまちのあちこちに立てて守り	
天武元年	7月	4日	当麻・臺池のほとり	大伴連吹貞・来目	大伴連吹貞	—	刀・馬	金剛	—	騎兵による突入
天武元年	7月	4日	飛鳥上道・中道・下道	大伴連吹貞	—	—	交通路の封鎖	—		
天武元年	7月	4日	中道・村屋	犬養連五十君・麿井告館	大伴連吹貞	200の精兵	—	本陣の奇襲	—	
天武元年	7月	4日	上道・箸墓	三輪君高市麻呂・道始連堺	麻井造館	—	後続の分断	—		
天武元年	7月	4日	奈良山	近江劇(大野君果安)	大伴連吹貞	—	—	駐屯地の襲撃→追撃	—	高所から京をうかがう→伏兵の想定
天武元年	7月	5日	倉歴	近江軍(田辺小隅)	田中臣足麻呂	旗・鼓・枚	夜襲	城柵	城柵を崩す	
天武元年	7月	6日	莉萩野	多臣品治	田辺小隅	—	防衛→追撃	—		
天武元年	7月	7日	息長の瀧河	村國連男依	境部連禰葉	—	—	本陣の奇襲	—	
天武元年	7月	9日	鳥籠山	村國連男依	紀臣阿闍麻呂・置海連桑	—	—	後続の分断	—	
天武元年	7月	9日	大和京	千余騎	千余騎	—	—	駐屯地の襲撃→追撃	—	
天武元年	7月	13日	安河のほとり	村國連男依	社戸臣大口・土師連千島	—	—	援軍	—	軍勢を分ける
天武元年	7月	17日	近江国?	村國連男依	要太の軍	—	—	—	—	大勝
天武元年	7月	22日	瀬田	村國連男依・大分君稚臣	—	—	追撃	—		
天武元年	7月	22日	三尾城	羽田公矢国・出雲臣泊	近江軍	—	旗幡・鉄鼓・弓・矛・鎧・刀	渡河地点の掌握	—	弓の列
天武元年	7月	22日	山陰・河の南	別将	—	—	攻城戦	三尾城	城が主戦場	
天武元年	7月	23日	栗津市	犬養連五十君・谷直塩手	—	—	—	—	三道から進んで、河の南に集結	